



過去1000年で最大の出来事

21世紀まで残すところあとわずかになった。これから欧米や我が国でも20世紀を回顧するテレビ番組や、関連の記事を掲載する雑誌が続出するだろう。

アメリカの代表的写真月刊誌「ライフ」は、昨年末過去1000年を振り返る特集号を出版した。振り返るのが100年でなく、1000年であるところが興味深い。同誌は特集号で西暦2000年を迎えるにあたって、1001年から始まった過去1000年の最も重要な出来事と人物のそれぞれの100選ランキングを発表した。特集号を出版する目的として、「現代はどのような歴史を経てあるのか解明するため」としている。ランキング作りのため、数ヶ月かけて数100人の専門家に協力を依頼したとのことである。その結果、最も重要な出来事の1位に選ばれたのは、1455年頃ドイツ人、ヨハネス・グーテンベルクによる聖書の印刷であった。活版印刷術の発明は宗教改革を刺激し、聖書の普及で特定階級のものだった読み書き能力が大衆レベルに広がり、人類の情報革命の先駆となったとしている。

第2位にはコロンブスのアメリカ大陸の発見、第3位はマルチン・ルターによる宗教改革、第4位は18世紀末にはじまったイギリスの産業革命、第5位はガリレオ・ガリレイによる地動説が選ばれた。100位までいちいち述べる紙面の余裕はとて無いが、全体として私達東洋人から見ると極端な欧米偏重に思える。

日本の関係としては、16位広島への原爆投下(1945年)、

28位オランダ東インド会社が平戸からお茶の積出しを行ったこと(1610年)、83位世界で最初の小説としての紫式部による『源氏物語』の制作(1008年)、88位明治維新(1868年)が上げられている。

また最も重要な人物としては、第1位に電球、蓄音機、ラジオ、テレビ、映画等を発明した現代技術の創始者ともいえるトーマス・エジソンが選ばれた。次にクリストファー・コロンブス、マルチン・ルター、ガリレオ・ガリレイ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、アイザック・ニュートン、フェルデナンド・マゼラン、ルイ・パストゥール、チャールズ・ダーウィン、トマス・ジェファソン、ウィリアム・シェイクスピア、ナポレオン・ボナパルト、アドルフ・ヒットラーと続く。

日本人としては唯一選ばれているのは、浮世絵師の葛飾北斎(1760-1849)で過去1000年で最も偉大な芸術家の一人としている。

私のような年代の者に強く印象に残っているものとしては、重要な出来事として第3位に選ばれた、人類が初めて月面にたったアポロ11号の月面着陸(1969年)がある。

現在私達は良くも悪しくもコンピューターに大きな影響を受けている。業務上は勿論、日常のあらゆる生活行動がコンピューターに振りまわされているといっても過言ではあるまい。しかし、このコンピューターの出現は重要な出来事の100選には入っていない。また最初のコ

目次

| | | |
|-----------------------|-------------------|--------------------|
| 過去1000年で最大の出来事 …… 1・2 | パソコン外論考(其10) …… 4 | 高齢者とパソコンブーム …… 6・7 |
| 新委員会編成決まる …… 2 | 出版文化史逍遙(29) …… 5 | 広告 …… 8 |
| 文化厚生委員会だより …… 3 | | |

ンピューターを製作したとされる、ジョン・W・モークリーやジョン・プレスパー・エッカートの名やコンピューターの技術を発展させたビル・ゲイツの名も出てこない。そうなると100選に選ばれた、グーテンベルクの活版印刷術の発明、イギリスの産業革命、エジソンが各種の製品を発明したとかの大きな技術革新の行われた場面に遭遇した際には、人類はどのような反応を示したのであろうか？ それこそ天地が逆さまになるような思いをしたに違いない。

私はこの「ライフ」誌を取り寄せてみて、グーテンベルクの活版印刷術の発明が重要な出来事の第1位に堂々と選ばれたことを知って、まさに我が意を得たという思いがした。

1987年10月22日私共は、このグーテンベルクが制作し

た『42行聖書』を、ニューヨークのクリスティーの競売で落札した。『42行聖書』が初めて日本で所蔵されることになった記念すべき日であった。私はこの当時から、グーテンベルクによる活版印刷術の発明は、人類の歴史の中でも最も重要な出来事であると述べてきた。すなわち、コロンブスのアメリカ大陸発見も、マルチン・ルターの宗教改革も、ガリレオの地動説といった全ての「歴史を変えた」情報や理論はグーテンベルクの発明した活字と印刷機によって、本として形作られ伝達されたのである。グーテンベルクが存在しなかったら、これらの情報や理論が出できたとしても、世の中に大きな影響をもたらしたかどうか疑わしいとした。私は「ライフ」がこのたび特集号を組んで私の理屈を支持してくれたと、勝手に考えている。本当に嬉しい雑誌記事であった。

丸善・美術古書部 富田修二

1998年度 J B I A 委員会編成が決まりました

| 委員会名 | 委員長 | 副委員長 | 委員 |
|--------|----------------|-------------------------------------|--|
| 総務 | 西川 統 (医学書院) | 松浦 拓己 (丸 善) | 平岩 寧(アカデミア・ミュージック) 田中庸夫(海外出版貿易) 山縣彌榮子(内外交易) 高橋邦夫(洋 販) 細川政敏(UPS) |
| 会報 | 杉山 明 (日 貿) | 平岩 寧 | 荒木亮一(医学書院MYW) 塚本正広(インターナレッジ) 石村善造 (カンダブック) 臼井英夫(教文館) 田村 隆(北尾書籍) 池田篤治 (極東書店) 川原勝洋(ロングマン) 昆野哲郎(丸 善) 堀井 康 (ミロブック) 沼尻 卓(三省堂) 長戸恵子(仲興通商) |
| 広報渉外 | 新田 満夫 (雄松堂) | 皆川純一郎 (H B J) | 小松崎敬子(絵本の家) 伊藤正子(イタリア書房) 矢部暁一(丸 善) 沼尻 卓 長戸恵子 成瀬 功(太陽洋書) 鶴 竜次(東亜ブック) 木原国夫(東京洋書) 山川真一(ユサコ) 清水弘文(雄松堂) 上原鉄夫(友隣社) |
| 事業 | 大倉 光弘 (洋 販) | 熊本 洋一 (丸 善) | 皆川純一郎 赤嶺和男(マイブック) 佐川美貴夫(三善) 村上直隆 (ナウカ) 大野利夫(日貿) 小野春夫(ペンギン) 雨宮孝行(タトル) |
| ダイレクター | 山川 隆司 (ユサコ) | 東篠 巖 (南江堂) | 乗原七男(医学書院) 正田 実(丸 善) 飯島 勇(ユサコ) R. カーペンター(雄松堂) |
| 文化厚生 | 斎藤 純生 (UPS) | 鶴 三郎 (東亜ブック) 村山 新吾 (ゲート書房) | 川原孝人(UPS) 上原鉄夫 乗原七男 宮川 修(丸 善) 西山久吉(西山洋書) 和田 茂(大洋交易) 小松守雄(太陽図書) 柴田厚生(東光堂) |

【敬称略】

箱根囲碁会（囲碁同好会）報告

7月11-12日（土・日）、定宿である箱根湯本「ますとみ旅館」において夏季合宿が開催され、参加者が一年間の進歩の程をそれぞれ確認し、悲喜交々、結果は全勝1名、3勝1敗5名で例年より成績が偏っていました。総勢12名。新宿から駅弁とビール付きの小田急ロマンスカーで約1時間25分、箱根湯本駅より徒歩10分程、「ままね湯」で汗をながした後、クーラーの利いた部屋でスイス方式による公式戦を4局、といのが恒例です。

イベントには何時も時間を割いてご参加ご指導くださる日本棋院の石毛八段は大変お元気で、往路復路そして宴会の間も冷えたビールを至極ゆっくりと楽しみながら話される姿は恰も「碁」の談議僧と言ったところ。大変勉強になりました。「生きた石を伸びては駄目だネ、生きていない石が伸びて繋がっていくのが大きい」、「三隅取れば充分ですよ」、等々のコメントに、皆一様に「これで勝てる」と自身をつけたようでした、が？

石毛八段は中国の状況に大変興味をお持ちです。特に女性のレベル・アップが顕著で「女流名人」などの差別的タイトルはなく、女性が男性に過去数年でキャッチ・アップできたのは謎の一つだとのことでした。拙宅のタウン囲碁会のメンバーに中国古典の先生がおりまして、レベルが違っても「置碁」はしない現地の碁愛好者の話をしてくれましたが、その辺が鍵かもしれません。因に、日本の女流棋士がそのレベルに達するには未だ10年はかかるだろうと言っておられました。われわれの同好会に女性棋士がいないのも無理からぬことでしょうか？

それにしても、中国の棋士は公務員として国の文化予算で育成されている。日本では、日本棋院が全く独立した企業として活躍しており、国の補助はゼロ。その上、ぎりぎりの予算のなかで外国の棋士も受け入れて育てている。石毛先生は、日本の政府がもっとグローバルな観点に立ち、文化面の国際交流を進めるべきだとのこと意見で、われわれも共鳴しました。中国がどの程度の文化予算を碁のために充てているのか視察に行きたいと熱っぽく繰り返しておられました。

われわれの熱戦の一部は深夜まで続き、その後も麻雀を数時間と堪能した2日間でした。参加者も皆、帰宅後に投票したと思いますが、89年度の参院選以来の自民党

の大敗北。そして翌早朝にW杯で多民族チームのフランスが優勝。大変エキサイティングな今年の合宿と週末でした。幹事の村山さん（ゲーテ書房社長）に参加者全員の感謝の気持ちをお伝えして報告とします。

(RA記)

箱根テニス合宿

空は私の心の色を映し出したかのようなどんよりした灰色だった。梅雨が始まったばかりの6月6日。その日テニスをするのでなかったら、1日中不貞寝をしていただろう。高速をぬけ、丹沢の山の中に入ると、道は霧雨に濡れた木々で明るい緑色のトンネルのようだった。木々の間からこぼれる弱い光が細かい雨を照らしていた。テニスコートは、箱根の保養所などが立ち並ぶ一角の奥まったところにあった。もう既に何人かの人がプレーをしていた。心は重たかったが、体は早くテニスをしたと言っているかのようなようだった。MYWの西沢さんがいつものようにWarm-upに付き合ってくくださった。思えば去年の夏、津久井湖の合宿に参加して以来、西沢さんをはじめ、さまざまな先輩方が初心者の私に辛抱強く付き合い、テニスを教えてくださった。ボールを追うのに夢中になり沈んでいた心は、どこかに行ってしまったようだ。それを察するかのように、天気まで晴れわたってきた。そして蒸し暑くなった。やっと体が動くようになった頃、混合のダブルスで試合をすることになった。私は試合が苦手だ。力が入って思った通りに球を制御できないのだ。内心どこかに隠れてしまいたい気分だった。試合中、普段なら簡単に打てるボールをネットに当ててしまい奈落の底に落ちたような気持ちになった。ボレーやリターンを決めれば、喜びの絶頂に到った。結果はブービー賞3人のうちの1人であったが、それでも勝率は（その中で）良かった方だ。すこしは上手くなってるのかなと嬉しくなった。テニスの後、箱根強羅で白い湯の温泉に浸かり、それから宴会をした。終わってみれば結局、私の好きなことづくめの1日であった。

ロングマン・ジャパン(株) 小嶋

パソコン外論考 (其10)

宇田川一彦 Udagawa Kazuhiko

◆どうも、まいど！で・／Just one of those things

子曰、女得人焉耳乎、(子游)曰、有澹臺滅明者、行不由徑、

The Master said, 'Have you made any discoveries there?' (Tzu-yu was the steward of Wu Ch'eng.)

He said 'There is one T'an-t'ai Mieh-ming who never takes short-cuts.'

(論語/雍也・Confucius; The Analects/Book VI)

【超拙意訳；(弟子の子游が武城の市長となったとき)先生は尋ねられた。「どうかね、武城にはいい人物がいたかね?」子游は、「はい、性は澹臺、名は滅明、という人物を見つけました。彼は、道を歩くときに、決して『近道』をしようとはしません」と応えた。】

【外注；結構当時の中国の政治の世界には、現在の日本の政治家(せいじ「か」、ではなく「や」と読みます)と同様に「請託」が横行、でも、「澹臺滅明」という人は、疑惑を受ける様なことを一切しない潔癖な人物だったようです。で、子游の紹介で孔子に弟子入り。ただ、醜男だったようで、孔子はあまり重要視しなかった。しかし、後年「史記」弟子列伝では、弟子300人を持ち諸公の間では名声が高かった。孔子が人を容貌でみてはアカンかったと嘆いた、とか・・・ってな伝説あり】

某月忘日。約30年程前、1969(昭和44)年、亡父が舅のために記した墓誌を筆写のために、青山墓地まで出かけました。1回目は、写真にとってきたのですが、黒色花崗岩高さ65cm、幅70cmの碑一面なのですが、どう頑張ってもプリントしても一部読めないのです。で、2回目の墓参りとなった次第。

墓誌銘として彫られた文字は、假名交じり読み下し文で、1,285文字。筆写に要した時間は、約4時間。理由は、なるべく早いうちに文章をテキストファイル(DOS/Text)にしておこうと思ったからです。

当時は、「月面着陸成功」と映画「寅さん第一作」の時代。パソコンから印刷するなどとは想像できない頃でした。故に、親戚等約100部程度を、いまや懐かしい「ガリ版刷り(16頁)」で「墓誌建立挨拶・墓誌銘並ニ撰文者自注」という冊子形式で配付したのです。で、この時の一部が、茶色に変色してボロボロになりつつあります。そんなことで、テキスト化をさせているのです。

が、どっこいなにぶん筆者の読解力では読めない状態、部首変換・JISコード入力を駆使するも、遅々としてパソコン入力が進まないのです。

『薩摩ノ人、幼ニシテ穎脱ノオヲ示シ、年十四笈ヲ負ヒテ熊本英語校ニ学ビ、蟹行ノ文字トトモニ、超越獨一ノ神アルヲ知リス。後、東京商船学校ヲ経テ、エディンバラニ航海術ヲ学ブ。ソノ操ルトコロノ英語、終生スコツツノ訛音ヲ脱セザリシ以所コトニ胚胎ス』

『縁アリテ瑩域に杖ヲ牽キテ、此ノ碑ヲ讀マン人ハ、知ルベシ、人事ハマコトニ虚妄夢幻ノ如クニシテ而テナホ意味ノ深長ナルモノアリ、ト。田彦之識』

ということで、この墓誌のテキストファイル化には、必須のものがふたつあります。

「パソコンワープロ漢字辞典」。これはJIS漢字の第1水準2,965字/第2水準3,390字まで掲載されて、JIS/区点/シフトJIS/ASCIIの4種類のコード入力ができるようになっているものです(現在は、この手の辞典では、補助漢字5,801字を加えてUNIコード(次回以降で後述)引き可)。

もう一つは、「漢和大辞典」(中以上であれば可。小は、筆者みたいな読書用眼鏡使用者には不可)。

それにしても、この漢字が何と読むのか分からないときはもう「漢和大辞典」様々です。墓誌を彫った人(篆刻師)のミスで(とはいっても本誌のように校正ができず、一発校了みたいなもので、まあ、博奕です)。旧字体なのに画数が一画足りないとか、一画多い変な新字体とか、変な略字と思っていたら、カタカナなのか漢字なのか判別できない文字(「堪へ」とあるべきものが、「堪エ」と新かなづかいで刻印)など結構悩みました。

で、この新旧の送りと新字体と旧字体等々の問題は、1934(昭和9)年から連綿と続く「国語審議会」の答申毎にふらついていました。今回の第21期(本年7月4日発足、以降委員45名で2年間にわたって審議)でも、またも迷走が予想されます。まあ、ワープロ漢字の基準を2年かけて作成といいますが、何を考えているんだか分からん、というのが現在の筆者の心境です。

パソコンの普及した時代(1980年代初頭)から「鵯外」とは「鵯外」のことか?と問題になっていたわけでした。このパソコン黎明期からの印刷標準字体と簡易慣用字体、送りかな等の三位一体(漢字・ワープロ・プリンター)問題を次回以降、少し取り上げてみたいと思います。乞御期待。

明治初期の目録に見る洋書〔1〕

丸善・本の図書館 鈴木陽二

前回までウェブスター辞書の輸入を調べてきたが、これからしばらく明治初期の洋書輸入の様子を目録によって探ってみることにしたい。明治初期においても、高等教育機関・政府省庁の図書館や公共図書館などの蔵書目録、また輸入業者の販売用目録が、多いとはいえなまでも結構残っている。そのすべてを検討するわけにはいかないので、ここでは輸入業者のケースとして、丸善の目録によって明治初期における洋書輸入の軌跡をたどってみることにする。

明治初期を仮に明治20年までで区切ることとして、現存している丸善の洋書目録は、明治9年(1876)、明治16年(1883)、明治18年(1885)の3種類である。前にも触れたと思うが、丸善は明治6～7年ごろから洋書目録を発行しだしたと思われる記録もあるが、残念ながらその時代の目録はまったく残っていない。明治期の目録としては上記3点のほかにも数種類残存しており、また明治30年になると『学鑑』の発行が開始されるので、それ以降は同誌に掲載された洋書の新刊・在庫案内(アナウンスメント)によって輸入の状況を継続的に見ることができるようになる。

ここでは、明治9年、16年、18年の3種類の目録によって初期の洋書輸入を検証してみることにしたい。

◆明治9年洋書リストにみる輸入の状況(1)

明治9年に丸善は『ナポレオン法典(仏国民法)』の英文版を復刻刊行した。『ナポレオン法典』はいうまでもなく1804年から1810年までの間にナポレオンによって制定された法律で、その中のフランス民法は1804年に制定され、世界最初の近代的な法典として諸国の立法の模範になったといわれている。英文版は、ロンドンの「法曹学院」の一部門である“THE INNER TEMPLE”所属の弁護士によって翻訳・編集された。同法典は明治2年に始めて日本に将来し、フランス語に堪能であった箕作麟祥によって原典より『仏蘭西法律書』として翻訳されたが、この法体系は明治23年に公布された日本最初の民法に影響を与えた。司法卿江藤新平を中心にフランス人お雇い外国人ポアソナードによって民法の編纂が進

められていたところで、丸善による英文版復刻はそういう事情を背景にした時宜を得たものであったろう。

ところで、この本の巻末に洋書のリストが収録されているが、おそらく丸善の現存している洋書リストとしては最も古いものであろう。リストは“LIST OF FOREIGN BOOKS SOLD BY Z. P. MARUYA & CO.”と題する4ページもので、68点の洋書が収録されている。大部分が思想と社会科学関係のものであるが、明治初期の学問の動向を映した文献が並んでいて、この時代の学術事情を知る上で貴重な資料であるといえる。同時に、このリストは日本の洋書業者の残存している広告としても多分一番古いものではないかと推測され、明治のごく初期における輸入の実状を証左する原資料でもある。

内容について触れてみることにしよう。まず掲載著述の多いところを挙げると、ジョン・スチュアート・ミルの著作が14点、ハーバート・スペンサーが10点、マコーレーが4点、フォーセット夫妻の著作6点などが見られ、また古典的名著としては、モンテスキューの『法の精神』、トクヴィル『アメリカのデモクラシー』、ダーウィン『種の起源』、ベンサム『立法の理論』、ヒューム『人生論』『道徳、政治および文学論集』などが収録されている。小リストながら学術レベルの高い逸品揃いということができるだろう。

時代は下って明治35年になるが、内田魯庵は「十九世紀に於ける欧米の大著述に就いての諸家の答案」と題するアンケート結果を『学鑑』誌上に公表した。このアンケートは、その前年に広く知識人・学者に19世紀における欧米の学術成果を問いかけたものであり、日本国内だけではなく外国でも反響を呼んだ試みであった。その詳細はさておいて、回答の中で最も多く挙げられたのはダーウィン『種の起源』であった。丸善はこのころ出版社に交渉して廉価版をつくらせたことも影響して、仕入れても仕入れてもまたたくまに売り尽くすという巨大な需要があったようである。それにしても、明治9年の精選リストにすでに掲載されていることをみると、『種の起源』が早い段階から、また長期にわたり日本の知識層に受容されていた様子が理解できる。

高齢者とパソコンブーム —古いもの新しいもの—

島岡 丘

日進月歩のコンピューターの世界には高齢者はどうもついていけない人が少なくないらしい。

「パソコンをいじろうとすると、難解なマニュアルを読まなくちゃならないし、いらいらする。面倒なので、もうパソコンいじりは止めることにしたよ。」

という親しい友人の告白も聞いたことがある。そう言う私自身も、有能な身内のアシスタントがいなかったならば、途中で挫折し、パソコンを投げ出してしまったかもしれない。

私がしばらくアメリカに行って帰ってくると、私の机の隣に机が増え、L字型になるよう配備されていた。窓のほうを向けば、机の上に2台のパソコンが並び、壁のほうを向けば引き出しつきの普通の机になっていた。コンピューターのあるほうは、4段の棚になっており、一番下には辞書とマニュアル、それにフロッピーのセットがあり、手書きできる高さの台には、キーを打つためのキーボードとマウスがそれぞれ二つずつある。そして目の高さには13.5インチの画面と17インチの画面がある。ただし、新しいほうの画面の横に e-mail の時に音声を送るためのスピーカーが置かれている。キーボードとマウスはそれぞれ二つ同時に使うことがないので、使わないほうのキーボードはスクリーンの上に乗せておくことにした。

3段目の棚にはコンピューター本体（CPU と言うそう）とA-4サイズとB-5サイズの用紙が置いてある。ただし、新しいほうの本体は高さ奥行き共40cm強あり、棚には到底乗せられず、仕方なしに椅子の横の空間に置かざるを得ない。電源はファックスつき電話機を兼用しているので、アダプター（terminal adapter を略してTAと言うのが常識だそう）も必要で、本体の上に乗せている。TA がうまく機能しているときはよいが、調子が悪いと専門家に出張修理をしてもらうことになり、そのときは、一時間につき1万5千円かかる。TA の保証期間はわずか1ヶ月となっているので、注意が必要だ。

最上段には印刷機（プリンターと言うらしい）がある。プリンターも40×33×21cmと大きいので、それだけで4段目は一杯になる。印刷機は定期巡回検診のようなものがあり、巡回して来る人に年間何万円かは取られるこ

とになる。

器用な人は一つのスクリーンでよいのだろうが、私のように比較的長い間、一太郎の Version 5 で慣らされていると、Windows 95 の一太郎 Version 8 の新しい機能を十分に活用できないで困るのである。

「一太郎の Version 5 で Windows 3.1 です。」

と言って、ある会社の担当者にフロッピーを提出したところ、今頃こんな古い機種を使っているのかという顔をされてしまった。それ以降、Version 5 でフロッピーにファイルしても（「保存する」と言えばよい）提出するときには Windows 95 のほうで動くファイル（システムが異なるファイルがあり、その場合は初期化し直さなければならぬ）になおして提出することになっている。最近では手書きの原稿は嫌がられるそうである。確かにフロッピーのほうが処理をしやすいし、能率が上がるだろうが、手書きに慣れている人が、いきなりフロッピーで、と言われても困るであろう。

新しい機種のほうが、スピーディであり、容量も大きく、また、図形、表計算、統計処理など便利である。しかし、私が使っていた Windows 3.1 の Version 5 でも新しい機種にない便利な機能がある。その機能は次のようなものがある。

1 文書情報の機能がある。

ファイル名、ディレクトリ（C : ♀と表示される）作成者、作成日時、見出し、キーワード前回更新者、前回更新日時、更新回数、総編集時間、前回印刷日時、用紙サイズ、総ページ数

現時点の編集者名もすべて表示される。これらの情報はたいへんありがたい。

2 ビューアの機能がある。

パスワード、読込形式（通常、特殊）、定型文書編集、高速読込、強制編集があり、これらの機能を全部使うわけではないが、ファイルしたものをいちいち開かなくても読むことができる。

3 発音記号の便利さ

Windows 95 の Version 8 では記号の数は増えたが、発音記号はリストから一つ一つ取り出さなければならない、Windows 3.1 の Version 5 では、発音記号と指定すれば（半角文字にしてシフトキーを押しながら、F10のキーを押せばよい。）数字のキーがすべて発音記号となり、能率よく発音記号が書ける。

ただし、新しい機種と操作が異なるので注意すべきなのは、古い機種ではCにファイルするが、新しいのはAにファイルする点である。また、新しい機種では太字、イタリック、下線はマウスのドラッグによって、行われることも異なっている。

秋葉原の電化製品販売店や池袋や新宿のパソコン専門店などに行くと、次から次へと新しいパソコンが売り出されていることがわかる。消費を盛んにして景気をよくすることには反対はないのだが、使える製品も新製品を売するために捨てるのはどうかと思う。消費経済によって一時的に景気がよくなっても、それによって、私たちの回りの自然や環境が破壊されることになれば事は重大である。

数年前になるが、イギリスに行ったときに気付いたのは、同じ列車に新しい車両と古い車両が繋がっているということだった。PaddingtonからOxford行きの列車に偶然乗った車両は旧式だったが、途中Reading(地元では「ウレディング」のように発音している)に降りようと思ったら、出口がない!

いささかパニック状態になって、それまで座っていた8人掛けの座席に戻り、大声で、Can any of you help me open the door?と叫んでしまった。「必要は発明の母」とよく言ったものだ。必要にせまれば、誰でも英語が出てくるのではないか。

すると、若い人が笑顔を浮かべながら、ドアのところに来てくれて、まず、通路の窓を下げ、手を外に出して、外側からノブを回してドアを開けてくれた。そのイギリス人にお礼を言ったものの、自分で知っていたつもりが、とっさの時に活用できないのはまだ修業ができていないと思った。

古い物を大事にするという美德は日本語でも「もったいない」という言葉にあるのではないかと思う。イギリスのホテルで部屋によって調度品が異なることに気が付いたのは私だけではあるまい。

英語の表現に、throw the baby out with the bath waterがあるが、これは日常的によく使われる表現のようだ。OALD (Oxford Advanced Dictionary) のbabyの見出し語に (p. 72) その意味を次のように解説している。

to get rid of sth (=something) valuable or desirable at the same time as one is getting rid of sth useless or undesirable.

その意味は「がらくたを捨てるときに大事なものあるいは望ましいものを同時に捨ててしまう」ことである。

このような状況にしないためには、われわれのものの方を変えらなければならない。一般にわれわれがものを見る際に、物単位に、あるいは語句を単位に概念を形成しがちである。しかし、物事を機能別に、あるいはある特徴を単位にして捉えると、概念形成が変わってくるのではないだろうか。車両は乗客を運ぶという機能があるのであって、体裁が古いとか新しいとかは第一義的に重要ではない。ホテルの調度品にしても、それぞれの用途を果たしていれば、その用途を果たせなくなるまで使用することが望ましいであろう。

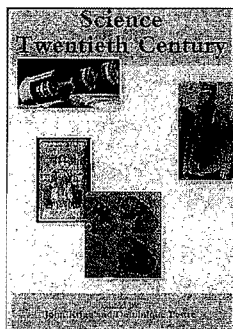
デパートでも会社でもドアはほとんど自動化してしまった。タクシーのドアも自動化してしまい、外国でタクシーに乗ろうとして、ドアが自然に開くのを待っていたり、あるいはタクシーを降りたときドアを閉め忘れたりすることがある。タクシーの自動ドアはどうも日本の国以外にはないらしい。もっとも日本製のタクシーを海外に輸出すれば別だが。

イギリスの田舎の方へ行くと、大きなデパートでも、自動ドアをつけていないところも少なくないようだ。昔、筆者が1年ばかり留学していたCardiffという人口35万人ほどのダウンタウンにも、自動ドアがなかった。それで不便かということそんなことはなく、後から来る人のために、ドアを開けて待っていてくれるところを何度も目撃したし、私自身も「郷に従え」で実行したものだ。ドアを開けて待っていてくれた人には笑顔でThank youと礼を言い、またそれに対して、Not at all. と言いながら、笑顔を返す情景は実に微笑ましい。自動ドアになったため、後から来る人を振り向くこともせず、一人一人が自分の事だけを考えていけばよい、という状況が生まれた。そのような状況通りの人が多くはならないことを望みたいものだ。

(茨城キリスト教大学)

8月の理事会は月末開催のため議事報告の記事が本号に間に合いません。9月号にて改めて報告いたしますのでご了承ください。

会報委員会



SCIENCE IN THE TWENTIETH CENTURY

John Krige, Director of Studies, Centre de Recherché en Histoire des Sciences et des Techniques, Paris, France
/ Dominique Pestre, Professor CRNS, Paris, France

Cloth ISBN 90-5702-172-2 ¥17,500 1997 1200 pp

SELECTED CONTENTS

IMAGES OF SCIENCE

Historiography of Science:

An American Perspective

M. Dennis

What is Science ?

S. Schaffer

On Seeing Brown Spectres

W. Faulkner & E.A. Kerr

SCIENCE AND THE SOCIAL

FABRIC

Science, Politics and the State

D. Pestre

Crafting and Disciplining the Tropics:

Plant Science in the French Colonies

C. Bonneuil

The Management of Society by

Numbers

T. Porter

Scientific Management and the

Production Process

Y. Cohen

The Discovery of Growth:

Statistical Glimpses of Twentieth-

Century Science

S. E. Cozzens

Academic Research, Technical

Change and Government Policy

K. Pavitt

Science and the University:

Patterns from the US Experience in

the Twentieth Century

R. L. Geiger

Science and the Military

E. Mendelsohn

Innovation and the Modern Corporation:

From Heroic Invention to Industrial

Science

B. Carlson

Innovative Networks and the Trans-

formation of the Pharmaceutical

Industry in the Twentieth Century

L. Galambos and J.L. Sturchio

INTERLUDE

Seeing and Picturing -

Visual Representation in Twentieth-

Century Science

M. Kemp

RESEARCH DYNAMICS

The Earth Sciences and Geophysics

R.E. Doel

Neo-Darwinism and Natural History

S. Kingsland

Clinical Research

C. Lawrence

Cancer: The Century of the Transformed

Cell

I. Lowy

A Science 'Dans le Siecle':

Immunology or the Science of Boundaries

A-M. Moulin

The Molecular Transformation of

Twentieth-Century Biology

P. Abih-Am

Biochemistry, Molecules and

Macromolecules

H. Kamminga

Polymer Chemistry

Y. Furukawa

Atomic and Molecular Science

1900-1960

M.-J. Nye

SCIENCE AND ITS PRACTICES

Material Culture, Theoretical Culture,

and Delocalization

P. Galison

Biologists at Work:

Experimental Practices in the Twentieth-

Century Life Sciences

J.-P. Gaudilliere

Mastering Nature and Yeomen:

Agricultural Science in the Twentieth

Century

D. Fitzgerald

The Role of Physical Instrumentation in

Structural Organic Chemistry in the

Twentieth Century

P. J. T. Morris

REGIONAL AND NATIONAL

INSTITUTIONS

Science in the United Kingdom:

A Study in the Nationalization of Science

D. Edgerton

Russian Science in the Twentieth

Century

N. Kremensov

Twentieth-Century German Science:

Institutional Innovation and Adaptation

M. Walker

YOHAN (日本洋書販売配給株式会社)

営業本部

〒169-0072 東京都新宿区大久保3-14-9

STMグループ 電話 03-3208-0186(直通) FAX 03-3208-5308

支店/札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡・沖縄・ロンドン



A member of the Gordon & Breach Publishing Group

harwood academic publishers

Australia / China / France / Germany / India / Japan / Luxembourg / Malaysia / The Netherlands
Russia / Singapore / Switzerland

1998年8月

通巻第375号

洋書輸入協会

編集者 高橋 紘

〒103-0027 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

☎(03)3271-6901 FAX.(03)3271-6920